償金稼ぎの化け狐～紫の幻影～

月夜魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
償金稼ぎの化け狐～紫の幻影～

【Ｎコード】
Ｎ９１６０Ｚ

【作者名】
月夜魅

【あらすじ】
この世界に伝わる都市伝説に、『紫色の満月が現れた時、法律で裁けない罪人が死ぬ。』というものがあります。実はこれ、“ある組織”をなぞらえた本当の話し。その組織が、この物語の【主役】であり、【悪役】であります。
※別の場所で私が上げていた小説のリメイク版です。

序章〜紫の来訪者〜

アーシア地方。海を望む小さな国。環境汚染や破壊なんて無い、世界一美しい場所。そして、世界一危険な場所。

――リーティタウン

アーシア警官隊が、黒い鞄を抱いて走るゴウカザルを追う。中には、一億円そうとうの宝石。そう、アーシア地方は……【世界一犯罪が多い国】なのだ。
加工場が立ち並ぶ路地を縫って走るゴウカザルに、攻撃の指示が入る。

「ハーデリア第一部隊、十万ボルト！！放てーッ！！」

一番前を走るは、警察帽子をかぶったムーランド。数十人のハーデリアが前を走り、ゴウカザルに向けて十万ボルトを放つ。走りながら繰り出す技は、中々命中しない。ゴウカザルは間一髪で路地裏へ。

「追うぞーッ！！」

「「おーッ！！」」

事件が起きている傍ら、一艘のフェリーが港に到着。観光客がぞろぞろと港にあふれ出る。その中に、大荷物を引っさげる団体が……。

「ここが、次の拠点となるアーシア地方。」

「ケッ！犯罪が多いと聞いて来たってのに……。案外穏やかじゃねぇかよ！！」

「ボス、早く根城を作りましょう。アタシ達、償金稼ぎの根城を……。」

荷物を持つ、五人のポケモン。彼らが見つめる先には、着物姿のゾロアーク。色違いで、鮮やかな紫色の鬣を風に泳がせている。

「ここで再び……。刀をふるうことが出来るのだな。……楽しみだ。」

☆★☆★☆★☆★☆

償金稼ぎの化け狐
～紫の幻影～

★☆★☆★☆★☆★

さぁ、新たな物語の始まりです！！

-To be next-

序章～紫の来訪者～（後書き）

【ｏｕｔ　ｓｔｏｒｙ】

その晩……。
狼に似た遠吠えが町を包み込んだそうな……。

ふと、夜空を見上げると……満月が淡い紫色に染まっているように見えた。

錯覚だろう。

ポケモン達は、そう考えて気にはしなかった。

★☆★

1説：ユメウツツ

聖頼一〇一二年……。時空は穏やかに流れていき、今の世界が出来上がった。
ここはアーシア地方、リーティタウン。自然豊かな港町。ちょっと、この町を案内しましょう。

港を離れてすぐの広間は、いこいの広間。タイル張りの足場がオシャレ。中央には噴水があります。海を眺めながら水浴びをする、一体のセレビィ像が観光客を出迎えてくれます。
セレビィ像を正面に、向かって右は町の中。坂道になっていて、津波からの災害対策に鉄の門が入り口に。警報が鳴ると自動で閉まります。
向かって左は、加工場が多く立ち並ぶガラン街。いつも機械音が絶え間なく響いているので、そう呼ばれています。
犯罪者の根城になりやすい場所が多いため、警察署は正面の道を通った広間に建っています。町とガラン街を効率良く監視するため、わざわざもう一つ広間を作ったと言われています。

さて、ガラン街は危険なので……。町の中へ行きましょうか。

――リーティタウン

高台の町、リーティタウン。人間界と変わらない、ありふれた日常が広がる世界。路上では、バリヤードの手品。コロトックの演奏会も展開されている。
移動屋台のアイス屋さんには、お金を握る小さな子ども達。観光客のポケモン達は、明るく華やかなこの町を気に入ってくれたようだ。

とあるカフェテラス。紫のチャイナドレスを纏う女性ルカリオを発見。よく見ると、本来あるはずのトゲが全て無い。
彼女の前の席に座っているのは、鮮やかな紫鬣のゾロアーク。腕にはリング止め式の白い着物袖。紫の袖無し着物に、白い袴。脇差しに見立てて、扇子を刺していた。
彼らは一体……？

「美しい場所だ……。」

「刹那様の方が綺麗ですわ♪本当に、犯罪が多い国なのかしら？こんなに輝いていて。」

「見えないか？リィ……。」

「？」

脇から扇子を取り出し、柄をルカリオに見せた状態でゆっくり扇いだ。

「光在る所に影有り……。ここは、我々が“刈り”をするにふさわしい場所だ。ようやく君に、美しい鮮血(バラ)を捧げることが出来るだろう。長旅の疲れが取れるくらいの、綺麗な鮮血(バラ)の花を……。」

「まぁ！楽しみだわ♪」

ごく普通の恋するカップルだが、かなり異常な雰囲気が漂っている……。いや、異常を通り過ぎて異質な……。危険な香りがする。

「早く刈りがしたいなぁ～。花弁に溺れる刹那様、久しぶりに見たいもの。」

「時期に見れるさ。今日の深夜、闇が活動する時間帯にね。」

ゾロアークが見つめる先は、遠く離れた路上。そこに潜むは怪しげな集団。マニューラ、ワルビル、ブラッキーの三人だ。何かコソ

コソと話しをしている。
小さく笑うゾロアークに、ルカリオは胸踊らせている。何か見つけたんですね？と、嬉しそう。

マニューラ達は、何の話しをしているのだろうか。体にはヤクザの刺青が刻まれている三人は、ナゾの実葉っぱで作った麻薬を吸っていた。麻薬と言っても、ただのタバコ。この世界では、危険な麻薬だと法律で禁止されている。

「マニュの兄貴、こんな目立った場所にいていいんですかぃ？」

「わざとだよ。わ・ざ・と！警察はもう動いてるんだ。しかも噂のテッカ忍者隊だ。逃げたくても逃げられねぇ……。だからよ、捕まる前に伝説を試してみたいんだ。」

「「伝説？」」

「あぁ……。俺達罪人が恐れている、【紫の幻影伝説】さ。チームヴィオレットと名乗る償金稼ぎでね、普通なら依頼があるだろうが、奴らには不要。」

「なんでです？」

ブラッキーが聞いた。

「……幽霊だからだよ。」

「「ゆ……幽霊？！」」

「見た者は、その日に絶対死ぬらしい……。今夜は満月。深夜にまたここで落ち合おう。軽い肝試しさ。居る訳ないよ。」

――とある根城

ルカリオとゾロアークが、根城へ帰って来た。ルカリオはご機嫌斜め。

二人の根城は、なんと町中にある。使われなくなった廃工場……の下にある地下室。元は倉庫だったのか、かなり広々とした空間だった。

天井にはシャンデリア。そう大きくはなく、あまり華やかなではない。赤煉瓦の壁に囲まれた空間には、柔らかいコットンベット。大きなタルが三つに、スーツケースが七つ。キャンプ用のテーブルが部屋の真ん中を陣取っていて、椅子が六つ。仲間と思われるポケモン達がチェスをしていた。

「あ、お帰りなさいませ！ボス！リィ嬢！」

ホウキ片手に、ブーピックが二人を出迎えた。不機嫌なルカリオ、リィはベットに座り込む。

「幽霊じゃないわよ！！失礼ね！！ぜーったい刈ってやるんだから！！」

ゾロアーク、刹那はリィの傍らに寄り添う。優しく頭を撫でてなだめてやる。

「まぁ、落ち着け……。羊の戯言だ。みんなだって餓えている頃だろう？」

「刈るんスか？！」

耳にドクロピアスをしたグライオンがはしゃぐ。チェスを忘れてゾロアークと会話。グライオンのチェス相手をしているヤミラミは、コマを持って悩んでいた。

さて、そろそろ彼らについて語らねばなりませんね。
彼らは償金稼ぎ、【チーム・ヴィオレット】。法律で裁けない罪人を裁くのが仕事だ。チームメイトは、刹那含む六人。

このチームのクイーン。ルカリオのリィ。一五歳。
フルネーム：ルカ・リィ

元“切り裂き魔”のグライオン♂、レイガ。本当の（捨てた）名前はアックス。二五歳。
フルネーム：レイガ（アックス）・ザ・デスヘルズ

依頼運び人のヤミラミ♂、ミィト。一〇歳。もう釈放された話しだが、母親を殺した罪を背負っている。
フルネーム：鬼火山　ミィト

掃除婦のブーピック♀、マライラ。二〇歳。死体の後始末や証拠隠

滅も彼女の役目。フルネーム：ネーガ＝ノル＝マライラ

食料調達などの雑用係。オオタチ♂のタヒチ。一二歳。マライラと同じ仕事もする。紫のヘアバンドがトレードマーク。
フルネーム：タヒチ・メル

そして、このチームのボス（リーダー）……。ゾロアークの刹那。一九歳。これまで刈ってきたポケモンは数知れない。
フルネーム：神舞刹那（かんむせつな）

全員、異国民族同士の悪人予備軍。命を奪うということは、悪同然だ。

だが、彼らは正義の使者。彼らチームは、政府が生み出した極秘組織なのだ。

彼らが仕事をするには、刈るターゲットに対して〈悪意を持つ者〉を見つける必要がある。死刑に属する犯罪なのに、法律では裁けない罪人に対する〈恨み，憎しみ，憎悪〉……。それを集めて依頼とするのだ。
最低七人の悪意を聞き受けてから、彼らは満月を待つ。何故満月なのか……。それは、刹那の血族が関係しているらしい。しかし、彼は自分のことを仲間には話さない。よって、理由は不明。

「くーッ！！腕が鳴るぜ！！」

「……よしここ。」

「お！そうきたかミィト……。……チェック！」

「あー！！負けたぁ。」

「チェスは終わったな？みんなで行って来てくれないか？今日は姫がご機嫌斜めなんだ。ターゲットは、マニューラ，ワルビル，ブラッキーの三人だ。」

刹那の胸に顔を埋めるリィ。よっぽど悔しかったのだろう。刹那に抱きしめられたまま、ピクリとも動かない。
返事なく、ミィトとタヒチはスーツケースへ。フタを開けて服の山を探り始めた。

「これとこれと……。よし！」

「こっちも準備オーケー！投げ渡すよー。」

二人共、黒いコートと帽子を来て準備万端。タヒチが全員分のコートと帽子を投げる。一番に受け取ったのはレイガ。

「よ！……しゃあっ！みんな着替えたか？行くぞ！」

一足先に階段を上り、天井扉を開ける。

着替えた仲間達を外に出してから、刹那に一礼して外へ。

二人きりになった、ボスとクイーン。沈黙を破り、刹那はリィを押し倒した。目と目が合い頬を赤く染める。

「刹那……様。」

「さぁ、姫……。お遊びの時間ですよ。」

――リーティタウン

さて……。今回はレイガの視点から、悪意を集めていきましょうか。

活気溢れたリーティの市場。黒を身に纏ったグライオン、レイガは空を舞っている。風に乗り、紙飛行機のように移動。それらしい会話をするポケモンを探すのは至難の技……。とにかく、手当たり次第会話の輪を回って歩くことに。

「ボスはいつも、どうやって悪意を見つけるんだ？一時間で帰って来ちゃうんだもんなぁー……。ひとまず、あの集団の話しを盗み聞きだ。」

レイガが目を付けたのは、公園で立ち話する女性ポケモン達。彼女達に気づかれないよう、茂みの裏へゆっくり舞降りる。

「ねぇ、あの三人組み知ってる？」

「えぇ……。麻薬常習犯のマニューラ達でしょう？噂では、密輸された麻薬をばらまいていたらしいわよ。怖いわねぇ……。」

「早く捕まらないかしら。」

――麻薬常習犯……か。なぁんだ軽いじゃん。この手のは、刈るよりおどすだけが一番だな。

茂みを離れ、音もなく立ち去る。風の流れに乗って、根城を目指した。
ため息混じりで飛ぶレイガは、なんだか残念そう。

――根城

全員集合……したけど、なんか様子がおかしい。刹那とリィの首には、なんと首輪が着いていた。鎖でつながっている。

「アンタらなんかしてたな……？」

「大人の事情でカットカット。……で？どうだった。」

ベットであぐらを書く刹那。悪徳商人みたいなツラで、情報を話せと命令。レイガとミィトが、主に会話に入った。

「俺様レイガが得たのは、麻薬常習犯ってことだ。噂では、密輸された麻薬をばらまいているらしい。」

「ウッちゃも。それしか情報なかったッスよ？脅すくらいしかならないんじゃないですけぇ？」

「……。そうだな。だが、一度目を付けた奴は逃がさない。それが俺達のやり方だ。脅すくらいしかならないけど、いいな？文句あるやつは挙手！！」

――シーン……

「よろしい。」

立ち上がり、軽く指を鳴らす。リィと繋がっていた首が消えて、代わりに日本刀が現れる。塚を取ると、刹那が冷酷な犯罪者に変わった。悪魔……いや、もはや死神の域の恐怖。

「では今夜……。宴(うたげ)を始める。よいな？」

――夜

あの路上に、マニューラ達がいた。歩きタバコをしているマニューラは、月を見つめて笑っていた。月は協会の後ろにあり、屋根を照らしている。

「白いな。」

「よかった。やっぱりいないッスよ！」

「クロ、お前怖かったのか？」

「い、いいえ！！そんな……。ただの伝説ですし。」

「そうそう、ただの伝せ……。……！！」

マニューラは、再び見た月に恐怖を覚えた。色が、鮮やか紫に変わっているのだ。しかも、協会の屋根に誰かいる。ワルビルとブラッキーも、協会へ目を向けてみた。やっぱり……いる。背筋が凍りつき、足が震えて動かない。

「む……紫の、月……！！」

屋根の上、怯える三人を見つめて笑う。咆哮は狼に似ていて、更なる恐怖を与えた。危険を悟り逃げる、弱者の悪人。しかし、彼らの背後にはルカリオが。チャイナドレスを纏う、女の子。

「誰が幽霊ですって？」

怒り心頭のルカリオ、リィが取り出したのは鎖鎌。市販の鎌の柄に、鎖がついているイメージで問題ありません。

「刈ってあげましょうか？」

「ひ……ひぃぃッ！！」

三人が引き返しても、退路無し。殺気立ったグライオンがこちらを見て笑っていた。

「観念しな……。悪党共。」

「あ……兄貴！やばいっすよぉー！！」

身を寄せ、三人は目の前の怪物を凝視。成す術が無く、レベルの高さもオーラでわかる程。無抵抗で死を待つしかなかった。

「マジ……かよ……。ホントにいるなんて……！」

グライオンの後ろに、まだ誰かいる。腕の膜をくぐって現れたのは、色違いのゾロアーク……刹那。凶悪な目付きで、笑みを浮かべる彼。脇には扇子じゃない物騒なモノが刺さっていた。和服には似合わないそれは、鞘から抜くと両刀で、細く美しい刃をしている。塚では無く、派手な装飾。刃の腹には奇怪な文字……。

武器名を上げるならば、サーベル。月明かりで桜色に染まる刃は、血に飢えているかのよう。

「闇に染まる愚かな魂よ……呪われし我ら、ヴィオレットの贄となるがいい……！！」

踏み込み、狂気する刹那が迫り来る。恐怖で叫び狂う三人は、刹那にとって羊にすぎない。血が欲しいと刀が言う……殺したいと思う自分がいる……。
サーベルを振り上げ、三人の真上に刃を落とす。

「「うわぁーーッ！！……？」」

寸止め。刹那は別人の顔をして言った。真面目な、正義の自分になって。

「次も悪事を働いたら、容赦無く刈る……。自首して罪を償えッ！！」

体を奮い起こして、マニューラ達は路上を去ろうと走る。リィが道を開けてやっているのを見つけて、裏から脱出。

これで大丈夫だろう。
刹那はサーベルを鞘に戻し、幻影を解いた。あの月、刹那が幻影で紫色にしていたらしい。

「あーあ。逃しちゃった。」

「リィ、テメェ本当は刈るつもりだったろ。」

「レイガだってそうじゃない？」

「ありゃ演技。マジになったのは、ボスとリィくらいさ。今回は脅しだ。ミィト達が根倉に残ってるんだし、帰ろうぜ？」

けだるそうに、レイガは刹那の背に話す。振り返った彼は、純粋真っ直ぐな人柄に変わっていた。

「そうだな。」

彼の微笑みは、別人格。三人は、路上裏から根倉へ帰っていった。ありふれた青少年の会話をしながら、纏っていた闇が嘘だったかのように。明るく。

-Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ-

1説：ユメウツツ（後書き）

【ｏｕｔ　ｓｔｏｒｙ】

みんなが眠る深夜、刹那は根倉の外で満月を眺めていた。

工場の屋上、サーベルはまだ脇に収めたままだ。刹那の横には誰もいない。はずなのに、白いモヤのような物体がいた。

これは……一体……？

＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9160z/

償金稼ぎの化け狐〜紫の幻影〜

2012年1月6日19時50分発行